

最近話題となっている病害虫

福岡県農林業総合試験場 技術主査 安部智子

トルコギキョウ斑点病

学名: *Pseudocercospora eustomatis*

英名: Leaf spot

トルコギキョウ斑点病は、2008 年に福岡県においてわが国で初めて発生が確認された（石井ら、2011）。その後、いったん発生が途絶えたが、2016 年になって再発が確認された。また、高知県、大分県及び熊本県でも相次いで発生が報告されている。本県では、2017 年 5 月末現在、県北部及び中部を中心に 6 地域で発生している。2016 年に発生が確認された地域では、やや沈静化の傾向にあるものの、一方では、甚発生のため収穫を断念したほ場もあり、今後の本病の発生推移には十分注意する必要がある。

分布地域: アルゼンチン、米国、ドミニカ共和国で発生の報告がある（Wolcan, 2005）。

病徴: 葉に、5 ～ 10mm 程度の退緑斑が発生する（図 1）。この部位には、のちに黒褐色のすす状の分生孢子が形成される。分生孢子は葉の表、裏両方に発生する。

病原菌: 感染した葉では、分生孢子は単生・淡オリーブ色で倒棍棒状、基部は円錐状に細まり截切状、 $20 \sim 60 \mu\text{m} \times 3.2 \sim 5.2 \mu\text{m}$ 、子座は小型で濃褐色、分生子柄は淡オリーブ色でシンポジオ型に分生孢子を形成し、離脱痕は不明瞭である（図 2）。

宿主植物: 現在確認されている宿主は、トルコギキョウのみである。

防除対策: 本病は夏場の高温期を除き、春から秋の多湿条件下で多発する。本県での現地調査では、定植前の育苗時期から本病が発生している事例が確認されており、育苗期に本病菌に感染した苗が本ぼに持ち込まれた可能性がある。本ぼでは下葉から発病し、上位葉に伸展する。初発を見逃すと防除が難しくなる傾向があるため、以下の防除対策を生産者に指導している。

(1) 発生助長要因として育苗中の多湿が考えられるので、ハウス内の湿度を下げるために換気を十分に行う。普段から発生に注意し、発病苗は速やかに取り除く。また、発生した育苗箱は別に管理し、経過に十分注意する。

(2) 病斑上にすす状・黒褐色の分生孢子がみられると完全な防除が困難なので、葉や茎に小斑点が生じた初発時に、ただちに発病部位を取り除き、ほ場外へ持ち出して処分する。

現在、本病に登録のある農薬はない。また、伝染環や有効な農薬について不明な部分も多い。今後の被害の増加を防ぐため、発生生態の解明や農薬登録を見据えた有効薬剤の探索を行う必要がある。



図 1 病徴（葉のすす状の斑点）

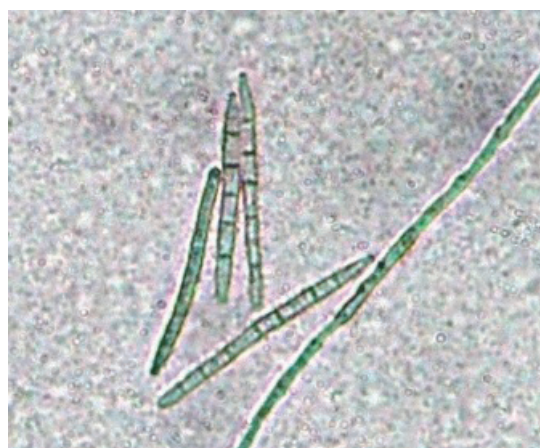


図 2 分生孢子

参考文献:

石井ら (2011) *Pseudocercospora eustomatis* によるトルコギキョウ斑点病の発生, 平成 23 年度日本植物病理学会大会講演要旨 77(3): 205.

Wolcan S. M. (2005) Occurrence of *Pseudocercospora eustomatis* on *Eustoma Grandiflorum* in Argentina. *Australasian Plant Pathology*. 34: 617-618.